

けないと思つて、いろいろと探していたら僕の立命館大学の卒業論文が出てきました。昭和二十二年のもんです。

僕は卒業するつもりはなかつたんです。が、学校から「長いこと大学に籍を置いているし、卒業したらどうか」と勧めてもらいましてね。単位は足らないけれども論文でよいというから、易について卒業論文を書いたんです。

「読んで卒業論文をご覧いただく諸先生へ提言す」というので、「易経」とのいきさつについて次のように書いています。ちよつと読み上げてみますか。

「私が易学に興味を覚えたのは師範学校在学当時でありましたが、適当な師もなく、ようやく『易経』を音読する程度でありました。その後、関西大学国漢専攻科に学ぶようになり、再び興が蘇ってきましたが、雑学に追われ、なお深求を試みる暇はなかつたのでした。……(中略)……たまたま昭和十七年夏、安岡正篤先生の易講が開かれることを耳にして、矢も楯もたまたまらず自業を休んで東上参学しました。その時易道の興味津々として尽きないものを初めて感得いたしました」

竹村 安岡先生が講じられる易はどのようなものでしたか。

伊與田 これもこの論文の言葉でこ

紹介しますと、

「安岡先生の易学に対するお考えは易は偉大な東洋民族哲学である。神儒仏の諸行にわたつてその深奥に入らうと思えば、易を学ばずしては済まない。易は真に行の学、創造の学、造化の学である」ということです。

それ以来、僕は策竹を使つたり、多くの本を読んで易の勉強をしました。当時のことを卒業論では「占筮のほうも習得したが、私の心に焼き付いて離れなかつたのは、易を講じて天眞を知る原理の学、修養の学というところにあつたのであります」と述べています。

竹村 なるほど、易は修養の学。

伊與田 しかし、僕はいつしか戦争勃発など外界の変転に魂を奪われてしまひましたね。研究はやめてしまふんです。次に易に関心を抱いたのは昭和二十年に応召して間もなくでした。

竹村 ああ、戦争中ですか。

伊與田 はい。卒業論には次のように書いています。

「昭和二十年応召して軍隊に入り、幸か不幸か脚氣を患ひ、ある農家に静養する身になつたので専ら易に心を沈めました。復員後は有源学舎に太平思想研究所を開設して籠居し、腹を据えて易の研究に没頭したのであります。ま

ず雑多な注釈書に頼ることをやめて、『易経』および十翼の筆写を始め、約七百時間を費やしてこれを玩味しました。『いよいよ易の正経であることを痛感するようになりましたが、その後西洋哲学や神儒仏等の宗教と比較研究し、また科学的研究を試みても、その広大無辺なるに驚き、聖人がこれを用いた真意が分かるようになりました。それとともに道は一にして古今東西を貫くものであり、脈々として次なる生命への泉であることを信ずるようにもなりました」

……と、まあこういうことです。

竹村 いまお話を聞いていまして、

先生と私にいくつかの共通項があるのに気づきました。伊與田先生は学問として易を学んでおられ、私の場合は『易経』は自分ひとりて読み続けておりましたが、『易経』以外の古典に興味のある人たち七、八人が集まり、先生も

交えずに東西の古典の勉強会を開いていました。そういう小さな学びでも三十年続いていると、易に繋がっていくいろいろな発見があつたんです。私の勉強会は趣味的な読書会で、東西の思想を組み合わせて、うんうん唸りながら自分の生き方との関連を考え

るんです。プラトンやニーチェ、老子

や莊子、世阿弥などもやりました。道元禪師とヘーゲルを組み合わせてみた時もありましたけれども、考え続けていくと、すとんと腑に落ちることがあるわけですね。「あつ、これは『易経』に書いてあることだつたな」つて。そして古今の教えが『易経』に通じていることが分かることますます易が好きになつてしまふんです。

伊與田 易はいったん入ると、出られんようになりますから(笑)。

竹村 また、『易経』の音読を続けて七、八年くらいつた頃でしょうか。

言葉の意味は分からなくても、どのページを開いてもおもしろいと感じるようになりまして。ですから先ほどの先生のお言葉を「あつ、そうだそうだ」とうなずきながら聞かせていただいたんです。

### 「易経」の奥深さを実感

伊與田 僕も昨日、忘却の彼方ではあるけれども、久しぶりに易の注釈である「十翼」を一日かけて全部読んでみました。そうしたら、若い時分では分からなかつたことがよく分かるんですね。改めていろいろなことを感じているところです。

竹村 『易経』は読めば読むほどおも